



越境

探究のさらに先 深めるうちに越えていた

「越境」コーナーは、京都大学らしい学問分野や国境の越え方を想起する資料を紹介しています。文理融合や理系と文系の交流を考える場合にも、本来は「知りたいこと」が大前提であり、越境はむしろ結果であるということを体現する多数の資料群です。共同購入された音声解析装置や地域研究を冠する大学院に結実する東南アジアでのフィールド研究の資料、世界中で資料情報の共有を図る植物学ネットワークなど、もはや

大学や国の境界などは意味をなさないかのような、もっと大きな連帯の形成につながる学問の力をうかがい知ることのできる資料の数々です。学部間の壁、学問間の壁、あらゆる境界を乗り越えてきた活動こそが新たな学問の道を切り拓くものとして、越境は目的ではなく手段であり、結果なのです。



地域研究



越える姿勢 越える責任

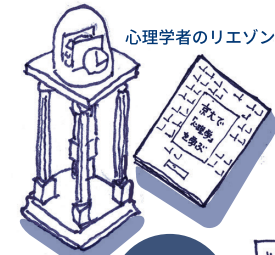
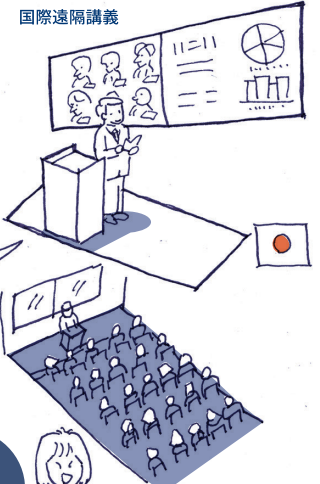
欧文学術雑誌



海を越えてつながる



国際遠隔講義



心理学者のリエゾン

時代を越えたつながり

世界を旅する植物標本



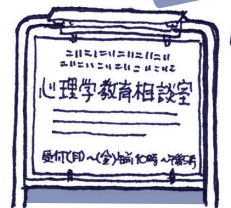
50年以上続いているの?



近衛ロンド



20年前に海外とオンライン授業!



アカデミックデイ



全分野交流



越境

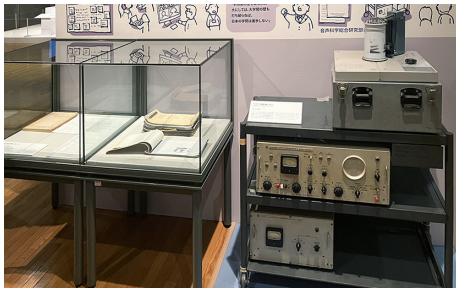


学問間の壁を越える

「学問間の壁を破ること、大にすれば、大学間の壁も打ち破らねば、日本の学問は進歩しない」

音声科学総合研究部会

なんで aiaigasa....



T1-1 ソナグラフと日本語の音声ソナグラム

昭和30(1955)年 購入
京都大学総合博物館 蔵

ソナグラフとは、音声を周波数分析して黒白濃淡模様に変換して記録する装置。文部省輸入器械補助金を得て購入し、その年の12月、医学部耳鼻科後藤光治を部長とする音声科学総合研究部が発足。音声言語に関する研究が世界で活発化するなか、生理学、医学、物理学、工学、音楽学、心理学、哲学、言語学及び教育学など総合大学ならではの多様な分野の研究者が集まり学際的な研究会を組織した。当時のNHKアナウンサーらが「aiaigasa」「kuiawase」などと発声して分析に協力した記録(音声ソナグラム)が残されている。

参考文献など

[1] 音声科学研究1961, vol.1, 140-152
<http://hdl.handle.net/2433/52633>

[2] The Phonetic Typewriter: Its Fundamentals and Mechanism. Sakai, Toshiyuki., 音声科学研究, vol.1, pp.140-152, 1961
<http://hdl.handle.net/2433/52639>



[1]

[2]

T1-2 音声科学研究1961, vol.1

昭和36(1961)年 発行
京都大学総合博物館 蔵

音声科学総合研究部会創立5周年を機に創刊した学術雑誌。大学では、ある関心の下に議論を重ねる研究会をひらき、その研究をまとめて論文誌として発行する繰り返しで、その後の後進の研究者が育つ。本誌は平成6(1994)年まで発刊され、現在に至るまで多くの学際的研究の萌芽となった人的関係構築に繋がる。第16代総長平澤は本会について「何よりも教室の壁を破ること、さらに学問間の壁を破ること、大にしては、大学間の壁も打ち破らねば、日本の学問は進歩しない」と取材人に語った。創刊号の巻頭言には「音声研究所となることを祈る」とあり、研究会から組織を発展させた先に研究分野確立への期待がうかがえる。

参考文献など

[1] 音声科学研究, 京都大学音声科学総合研究部会, Vol.1(1961)-Vol.28(1994)
<https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/handle/2433/52419>



[1]

音声科学総合研究部 ソナグラフ

「声」を知るために集まった様々な分野の研究者たち。文理融合とかアートとサイエンスの融合が流行り言葉になりつつありますが、融合そのものを目的化してしまうと、それぞれから一人ずつ連れてきて、「で、なにします?」みたいな話だけで終わってしまうので、あまりうまくいかない。ここで紹介するソナグラフは、ただただ「音声」に興味を持った研究者が集まり、それがたまたま医学部だったり、工学部だったり、文学部だったりしただけなのです。融合しようとかそういうことではなく、ただただそれが知りたいと集まったら分野間の壁を越えていた。

ソナグラフとは、音声を周波数分析して黒白

濃淡模様に変換して記録する装置です。いまから約70年もさかのぼると、目に見えない「声」を研究対象とするのは至難の業だったのです。文部省輸入器械補助金を得て1955年に機械を購入し、その年の12月、医学部耳鼻科後藤光治を部長とする音声科学総合研究部が発足します。音声言語に関する研究が世界で活発化するなか、生理学、医学、物理学、工学、音楽学、心理学、哲学、言語学及び教育学など総合大学ならではの多様な分野の研究者が集まり学際的な研究会を組織します。マスコミの時代と言われるようにラジオやテレビ全盛の時代背景もあったでしょうか、当時のNHKアナウンサーらが音声の記録に協力します。その発声に選ばれた言葉が面白



T2-1 ヒップ・クロノスコープとカイモグラフ

明治39(1906)年頃 購入
京都大学大学院文学研究科心理学専修 蔵

心理実験に使用された、1000分の1秒まで正確に測れる時間測定装置と回転円筒の煤紙に波動運動を記録する器械。文科大学に我が国初の単一の心理学講座を開設するときに松本亦太郎が持ち込んだ機器とみられ、1950年頃まで様々な実験に使用されるなど京都大学における心理学研究の歴史そのものと言える貴重コレクションの一部。文部省国語審議会の要請でカナ・ひらがなの読みの効率を調べる国字評価のため、眼球運動を観察するなどにも使用された。

参考文献など

[1] 実験心理学の誕生と展開—実験機器と史料からたどる日本心理学史, 学販直行, 京都大学学術出版会, 2001
[2] 心理学ミュージアム <https://psychmuseum.jp/collectionkt/>



[2]

T2-2 心理学教官連絡会が発行する書籍

平成13(2001)年 発行
京都大学大学院教育学研究科 蔵

京都大学心理学教官連絡会による、学内にある心理学研究を網羅的に紹介した本。連絡会は50年以上の歴史をもち、学内で心理学教育を行う文学部、教育学部、総合人間学部、情報学研究科、霊長類研究所など部局間の綿密な連携ネットワークを継承してきた実情がよくわかる。現在はこころの科学ユニット内に設置。

参考文献など

[1] 京都大学こころの科学ユニット
<https://www.kokoro-unit.kyoto-u.ac.jp/>
[2] 21世紀の心理学に向かって—京都大学の現状と未来, 京都大学心理学教官連絡会, ナカニシヤ出版, 2001

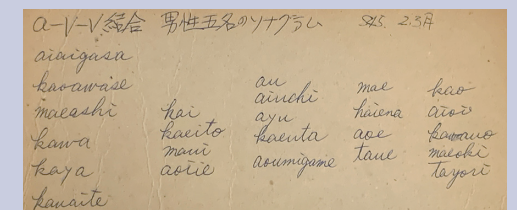


[1]

かったです。「aiaigasa」「kuiawase」など、なぜそのワーディングを?という選ばれた語彙が並ぶローマ字リストが面白いのです。

音声科学総合研究部会創立5周年を機に音声科学研究という学術雑誌を創刊します。大学では、ある関心の下に議論を重ねる研究会をひらき、その研究をまとめて論文誌として発行する。するとそこに投稿する若手研究者たちが育ち、またその分野を深掘りしてくれるという繰り返しで学問分野が成熟していきます。本誌は平成6(1994)年まで発刊され、現在に至るまで多くの学際的研究の萌芽となった人的関係構築に繋がるそうです。第16代総長平澤の言葉がまさにこの越境の在り様そのものです。「何よりも教室の壁を破ること、さらに学問

間の壁を破ること、大にしては、大学間の壁も打ち破らねば、日本の学問は進歩しない」



発声に選ばれた語彙が並ぶリスト



T3 「近衛ロンド」録音オープンリールテープ資料

昭和48(1973)年～昭和52(1977)年 収録

京都大学研究資源アーカイブ 蔵

「近衛ロンド」は私的に組織された「京都大学人類学研究会」の愛称で、昭和39(1964)年9月30日から原則毎週水曜夜間に楽友会館で例会が開催されていた。本資料は米山俊直(京都大学名誉教授)が録音を担当した記録で京都大学研究資源アーカイブに寄贈されたもの。箱の裏書と資料から、多様で希少なテーマを取り扱い、人類学部設立の構想を話し合う回が伺える。研究者、院生のみならず社会人も集い、かつ異分野交流の場であったと多くの人がその影響を語る。形は変化しつつ、今も京都大学の人類学に関心を持つ教員と大学院生によってその精神が受け継がれている。資料は当館1階映像ステーションで聴取可能。

参考文献など

[1] よりあいのかきとめ, 京都大学人類学研究会(近衛ロンド), 1-3 1974
<https://peek.rra.museum.kyoto-u.ac.jp/ark:/62587/ar33504.53653>



[1]



T4 京都大学における異分野交流の活動資料と学術雑誌

平成22(2010)年頃～

京都大学学際融合教育研究推進センター 提供

京都大学には従来から多分野の研究者らが集まる研究・教育グループがさまざまに組織されてきたが、2021年4月時点で大学公認の分野横断型プロジェクトは38にのぼり、月に一度開催される全分野交流会も10年継続するなど、先駆的な取り組みに多くの大学からの視察が絶えない。科研費区分79分野から研究者を集めた全分野結集型シンポジウムの成果報告書『学問の在り方』や、分類や専門で区切れない多様なテーマから学問に挑み、ピアレビューの過程も公開する対話型学術誌『といとうとい』など、異分野交流・研究の支援方法そのものを独創的に探究する活動がある。

参考文献など

[1] といとうとい第0号, 京都大学学際融合教育研究推進センター編著, ユニオン・エー, 2021
<http://www.cpier.kyoto-u.ac.jp/project/toitoutoi/>



[1]

歴史的実験心理学機器

ヒップ・クロノスコープは、文科大学に我が国初の単一の心理学講座を開設した松本亦太郎が持ち込んだ機器とみられ、文科大学の創立前年の明治39(1906)年頃購入されたとみられる。心理実験に使用された1000分の1秒まで正確に測れる時間測定装置であり、回転円筒の煤紙に波動運動を記録するカイモグラフとともに創立当初より受け継いでいる心理学講座所蔵の心理実験機器。いずれも1950年頃まで様々な実験に使用され、京都大学における心理学研究の歴史そのものと言える貴重コレクションの一部です。

当時、文部省国語審議会の要請でカナ・ひらがなの読みの効率を調べる国字評価のため、眼球運動を観察するなどにも

使用されたと言われ、京都大学の心理学研究と教育を支えてきた実験機器群の起点の一つ。天皇陛下の御行幸の際には、文科大学陳列館と実験心理学教室を御高覧いただいたとのことです。



ヒップ・クロノスコープ



T5-1 “The Kyoto University Economic Review” 創刊号

大正15(1926)年 刊行
京都大学経済学部図書室 蔵

経済学部が刊行した日本初の欧文経済学雑誌。日本独自の理論を創造する段階まで成熟した研究成果を英語で紹介することを目的とした。さらに創刊号の巻末には、京都帝国大学の経済学部や経済学会の紹介を英文で行っており、当時の日本では自然科学の学部でも見られない研究・教育活動の世界への発信と言える。この雑誌との交換で海外の大学や研究機関から入手したと思われる図書や雑誌の記録が経済学部図書室に残されており、世界の経済学誌と伍する力を備えた学術雑誌であったことがうかがえる。現在、後継の“The Kyoto Economic Review”は外部から投稿可能な査読付き国際論文誌。

参考文献など

- [1] わが国最初の欧文経済学術雑誌The Kyoto University Economic Review--創刊と世界への発信、櫻田忠衛、調査と研究、経済論叢別冊、vol.33、pp.19-35、2006
<https://doi.org/10.14989/151339>



[1]

T5-2 『経済論叢』創刊号1巻1号

大正4(1915)年 刊行
京都大学経済学部図書室 蔵

京都帝国大学法学会が発行した月刊学術雑誌。大正8(1919)年、京都帝国大学法科大学から経済学部が独立した時期に発足した京都帝国大学経済学会(現 京都大学経済学会)が引き継ぎ、現在も年4回刊行。学術雑誌の刊行は、当該分野の研究者が増えて定期的な論文投稿が期待される成長指標の一つでもある。

参考文献など

- [1] 『経済論叢』の歴史的意義、牧野邦昭、経済論叢、vol.189、no.1、pp.221-239、2015
<https://doi.org/10.14989/232739>
[2] 『経済論叢』創刊百周年を祝って―大学基盤学術誌の初心一、八木紀一郎、経済論叢、vol.189、no.1、pp.3-5、2015
<https://doi.org/10.14989/232722>



[1]



[2]

海外に発信する日本経済学

京都大学の経済学部が法科大学から独立したのは大正8(1919)年。先行して創刊された学術誌 経済論叢へ論文を投稿する研究者が増え、生え抜きの教員が教壇に立ちはじめます。京都に経済学者が輩出されるエコシステムが確立しはじめた大正15(1926)年、日本初の欧文経済学雑誌“The Kyoto University Economic Review”が誕生します。

欧米列国の経済学理論を翻訳、紹介していた時代から、日本独自の理論を創造し、さらには日本での経済学研究の成果を海外に紹介するまでに成長した段階に移行しつつあった時代であることを意味します。「江戸時代に250年

間鎖国しており～」からはじまる巻頭言の冒頭が、その時代を感じさせます。この雑誌との交換で海外の大学や研究機関から入手したと思われる図書や雑誌の記録が経済学部図書室に残されていて、そのタイトルを見ると当時世界の経済学誌と伍する力を備えた学術雑誌であったことがうかがえます。現在、後継の“The Kyoto Economic Review”は外部からも投稿可能な査読付き国際論文誌として発行されています。



T6 京都帝国大学から伝わる植物標本

大正8(1919)年～現在
京都大学総合博物館 蔵

総合博物館に収蔵されているさく葉標本。京都大学は、大正8(1919)年以来、学内研究者による採集、寄贈、他研究機関との交換などにより拡充した、約150万点の日本を代表する植物標本コレクションを有している。台紙に貼付されたバーコードの KYO の文字は、国際的な植物標本館ネットワークである Index Herbariorum から与えられた固有略号であり、続く8桁の数字は京都大学が保管するそれぞれの植物標本の固有番号である。植物学では研究推進のため、このネットワークを通じ標本の交換が積極的に行われており、本標本もその交換により保管されたもの。

Banksia marginata Cav. (ヤマモガシ科)：オーストラリア首都特別区ランデブークリークで1965年5月5日にR. Pullenにより採集。オーストラリア連邦科学産業研究機構植物標本館からの交換標本。[KYO 00029133]

Opuntia polyacantha Haw. (サボテン科)：アメリカ合衆国ネバダ州クラーク郡で1936年6月6日にI.W. Clokeyにより採集。カリフォルニア大学バーレイ校植物標本館からの交換標本。[KYO 00099367]

Pitcairnia sp. (バイナップル科)：エクアドル共和国ボリバル県で1987年9月10日にV. ZakとJ. Jaramilloにより採集。ミズリー植物園(アメリカ合衆国)からの交換標本。[KYO 000106429]

Leontopodium alpinum Cass. (エーデルワイス、キク科)：フランス共和国サヴォア県で1966年7月21日にユトレヒト大学調査隊により採集。ユトレヒト大学植物標本館(オランダ王国)からの交換標本。[KYO 00106430]

参考文献など

- [1] INDEX HERBARIORUM
<http://sweetgum.nybg.org/science/ih/>
[2] 植物の姿を同時に再現する、永益 英敏、日本最大級の標本コレクション、紅萌、no.12、pp.21-22、2007
<https://www.kyoto-u.ac.jp/sites/default/files/embed/jaaboutpublicissuekurenaidocuments12.pdf>



[1]



[2]

世界を旅する植物標本

植物学の先生から、「植物標本の交換」について教えてもらったとき、わたしたちがふだん使う交換という言葉のイメージとは違って混乱しました。たとえばある植物を採集した時点で30カ所のハーバリウムとやりとりすることを前提に採集しているそうで、どちらかと言えば標本の等価交換のようなイメージだそうです。バーコードとともに付された所蔵館アクロニム(KYO)と8ケタの数字が当該標本の識別番号で、この番号は世界のハーバリウムのデータベースである Index Herbariorum でユニークに設定されています。だから世界中の研究者が世界3,400の植物標本館から3億5,000万の植物標本データベースにアクセスして、目当ての標本を見つけて調べることが

できるのです。植物標本については、どこか一カ所のハーバリウムで資料を蓄積しているというよりは、地球の植物を世界全体で明らかにしていこうという世界博物館の様相を呈しています。

京都大学総合博物館には、1919年に開設された理学部植物分類学研究室の植物コレクションを基に、学内研究者による採集品、学外からの寄贈、他の研究機関との交換などにより、100年かけて積み重ねた国内最大規模の120万点の所蔵標本を有し、世界のハーバリアネットワークに貢献してるんですって。壮大・・・なんか・・・スケールでかい。



T7 石井米雄の出家証明書と研究資料等

昭和33(1958)年頃

京都大学東南アジア地域研究研究所図書室 蔵

石井米雄は、京都大学東南アジア研究センター(現 東南アジア地域研究研究所)のタイ国研究者。京大赴任前、外務省留学生としてタイに滞在中、3ヶ月間出家を行い僧名を賜うなど、現地語に精通し、地域に根ざした地域研究を欧米と異なる姿勢で行った。地域研究において自然科学系と人文科学系の協働の重要性を説き、研究コミュニティ形成と後進育成に携わったことが各種記録と著作から伺える。在職当時、文学部東館で行われた授業には非公式ながら地域研究に関心を持つ他大学の学生も多数参加し、その薫陶を受けたという。石井の姿と言葉は当館1階映像ステーションにある映像番組でも視聴できる。

参考文献など

- [1] タイ国一ひとの稲作社会(東南アジア研究叢書<8>), 石井米雄編, 創文社, 1975
- [2] 戒律の教い: 小乗仏教<世界の宗教>, 石井米雄, 淡交社, 1969
- [3] タイにおける千年王国運動について, 石井米雄, vol.10, No.3, pp.352-369, 1972
https://doi.org/10.20495/tak.10.3_352
- [4] 上座部仏教の政治社会学- 国教の構造, 石井米雄, 京都大学, 1980
<http://hdl.handle.net/2433/222409>



[3]



[4]



T8 京都大学とカリフォルニア大学ロサンゼルス校の遠隔講義プロジェクト資料類

平成10(1998)年~平成16(2004)年

京都大学情報環境機構 提供

1998~2004年に京大とUCLA、NTTが実施した国際遠隔教育の共同プロジェクトTIDE(タイド)。両校をATM回線で結び、映像・音声の配信や電子白板の共有によりリアルタイムかつ双方向性のある講義を実現。週2回英語の全学共通科目として開講。学生は大学を越えチームで課題に取り組んだ。当時最先端のインフラや自動撮影システム等を開発・運用した授業では情報学分野の教職員や大学院生がスタッフとしてバックヤードを支えたが、しばしば技術的トラブルに見舞われた。スタッフも受講生も様々な通信手段を駆使し授業を進行。講義終了後には互いを訪問し合い意見交換するなど絆と相互理解を深めた。

参考文献など

- [1] UCLAとの遠隔講義プロジェクトTIDEにおけるシステム構成,
八木啓介, 亀田能成, 中村素典, 美濃導彦, 電子情報通信学会講演誌, D-II, vol.J84, no.6, pp.1132-1139, 2001
http://kameda-lab.org/research/publication/2001/200106_ieice_d2/ieice-j84-d2_6_1132.pdf
- [2] KD-1-1 TIDEプロジェクト: UCLA-京都大学間遠隔講義,
中村素典, 八木啓介, 美濃導彦, 電子情報通信学会総大会講演論文集, vol.1, pp. 255-256, 2002

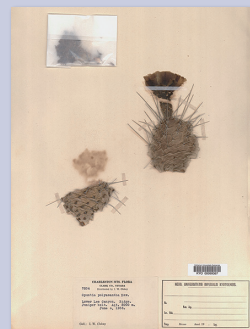


[1]



Trance-pacific Interactive Distance Education / Kyoto University-UCLA 1998-2004
(TIDEプロジェクト紹介映像) (7分)

* 多くの植物標本は、紫外線の影響を考慮して最大1か月くらいの展示期間に留めます。右の写真は企画展がオープンした最初の1か月だけ展示していたもう一つの植物標本で、カリフォルニア大学バークレー校(米国)と交換したサボテン科のおし葉標本です。



Opuntia polyacantha Haw.
(サボテン科)
[KYO 00099367]



T9 心理教育相談室のリーフレットと紀要創刊号

昭和49(1974)年 創刊／昭和29(1954)年 開設
 京都大学大学院教育学研究科附属臨床教育実践研究センター心理教育相談室 蔵

学内に設置された心理教育相談室の紹介冊子と相談事例論文を収めた学術雑誌。心理教育相談室は、教員の指導のもと大学院生が心理教育相談を担当する社会に開かれた機関であり、昭和29(1954)年開設。昭和55(1980)年からは全国初の有料機関となる。のちに河合隼雄助教授(当時)の指導の下、紀要が創刊され、これに院生が担当した相談(心理臨床実践)の論文に学外専門家がコメント論文を寄せる誌上スーパービジョン方式を採っている。なお、この頃から院生の研究指導にも同様の制度を開始しており、その画期的な教育システムは、現在多くの大学で採用されている。

参考文献など
 [1] 20号の節目を迎えて、桑原知子, 京都大学大学院教育学研究科附属臨床教育実践研究センター紀要, no.20, pp.1-2, 2017
<http://hdl.handle.net/2433/218998>



[1]



T10 京都大学アカデミックデイ関連資料と報告書

平成23(2011)年～毎年実施
 京都大学学術研究支援室 提供

京都大学アカデミックデイは、市民と研究者、研究分野の違いを問わず、多くの人に学問の営みや、研究者が研究に感じている魅力を伝えることを目指した対話の場である。平成22(2010)年に総合科学技術会議が「国民との科学・技術対話」を定めたことを契機とし、対話の重要性を再認識した若手研究者(当時)が発案。職員が大学が果たすべき責務と情報発信の在り方を模索していたこととつながり2011年から毎年実施中。現在、学術研究支援室・研究推進課・「国民との科学・技術対話」ワーキンググループが共同企画。ちゃぶ台を囲んだ膝詰め対話をはじめ、研究者と来場者が真に対話できる工夫を試行錯誤している。

参考文献など
 [1] K.U.RESEARCH : アカデミックデイ
<https://research.kyoto-u.ac.jp/academic-day/>
 [2] 原発をめぐる情報伝達に関する意見交換会から得られたコミュニケーションギャップ、
 白井哲哉, 水町衣里, 加納圭, 黒川絃美, 仲矢史雄, 元木環, 塩瀬隆之, 科学技術コミュニケーション, no.9, pp.107-119, 2011
<https://doi.org/10.14943/50098>



[1]



[2]

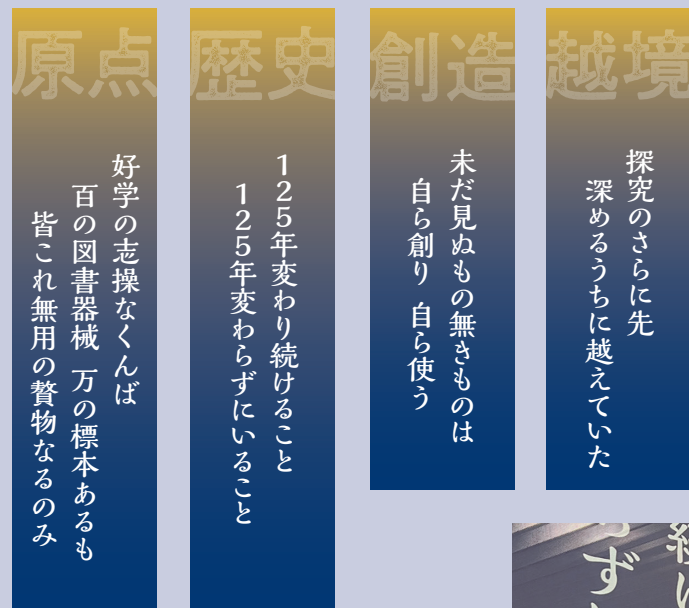


京都大学アカデミックデイ2013記録映像(1分44秒)

メッシュバナーによる新たな展示手法

展示の中身以外にも展示手法のなかに見所が隠されています。その一つが、実は展示レイアウトを考えるよりも先に、使いたいと先に決めていたほどの透け透けバナー。メッシュ状で透けてるのに、裏から見ても字は透けない。そう、裏表に違うことを書いてもいいし、違う写真にしてもいい。でも今回は文字情報が増えすぎということで、裏表同じ内容にしているのですが、注意深くみないとその不思議さはなか

なか気づいてもらえません。透けてるから圧迫感がなく、でもサインとしても機能するくらいはっきりと文字も読める。デザインの自由度も高い。創立125周年展示全体を通じて一番来館者に持ち帰ってもらいたいと思っていた言葉が最初のバナーにあるこの言葉、『好学の志操なくんば 百の図書器械 万の標本あるも 皆これ無用の贅物なるのみ』でした。



展示室にこめられたデザインコード

メインフロアでは、その範囲を大きく「創造」と「越境」の2つのエリアに分けていましたが、展示ケースのならべ方にデザインコードを隠していました。「創造」は縦(南北)、「越境」は横(東西)にそれぞれ展示ケースが並んでいるので、動線が南北と東西とで90度異なり、人の流れも変化します。部屋が分かれていないので、一室のなかでやりわりとゾーン分けするためにとった陳列方法なのです。脚の運び方が途中

で変わるの、やりわりとテーマが異なるということを感じてもらえたらという思いで工夫したものだったのです。

